様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３０６７

研究課題名（和文）井伏鱒二文学における翻訳概念の研究

研究課題名（英文）A Study of the Concept of Translation in Ibuse Masuji's Literature

研究代表者
塩野　加織（Shiono, Kaori）

早稲田大学・文学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：８０６４７２８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：まず井伏作品では、翻訳という行為が共同体の共同性を構築する政治的活動としてあり、それが作中の表記や音のレベルに至るまで動員されながら描かれることを明らかにした。またテクストの翻訳出版状況という点では、1940年代～50年代における日本文学の海外普及について、ユネスコの翻訳出版プロジェクトが、欧州と北米圏で日本文学が普及するための一つのインフラとして機能していたことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題を通して、文学テクストにおける翻訳表象のありようを表記や音の観点から新たに考察したこと、また、ユネスコによる日本文学作品の翻訳出版事業の特徴を明らかにしたことが学術的意義として挙げられる。社会的意義としては、これらの成果の一部を、国際研究集会にて国内外の人文学研究者と共有し、また他方で、文学館主催講演を通じ研究意義を社会に向けて発信することができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarified that in Ibuse Masuji's works, the act of translation is a political activity that builds a community, which is mobilized and depicted down to the level of notation and sound in his works. Furthermore, in terms of the distribution of works, it was showed that the UNESCO translation and publication project functioned as an infrastructure for the overseas dissemination of Japanese literature in Europe and North America during the 1940s and 1950s.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学　翻訳　井伏鱒二

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

作家井伏鱒二（1898～1993）について本研究代表者はこれまでに、社会状況・メディア環境・読者受容の視点等から個々の作品を分析する手法を用いて、井伏文学を近代文学史のなかに新たに捉え直す試みを実践してきた。たとえば、2010～11 年度の特別研究員課題（2010.4～2012.3:特別研究員 DC2）では、井伏を含む徴用作家たちの活動と当時の言語政策との関わりを同時代資料から精査し、井伏作品のメディア受容とその特質を明らかにした。さらに 2013～16 年度の科研費助成研究（2013.4～2017.3:若手研究Ｂ）では、表象としての「地方」が 1930 年代の地方翼賛運動の中に絡め取られていくプロセスを検証し、その中で井伏鱒二が採った戦略の内実を解明してきた。こうした研究の成果により、井伏文学には「翻訳」という要素がきわめて重要な位置にあることを新たに突き止めることができた。しかしその段階では、翻訳概念のさらなる精査やその同時代特性を十分に検証するまでには至っていなかった。これについて本格的に論及すべく本研究課題を設定した。

２．研究の目的

本研究は、井伏鱒二作品における「翻訳」のありようを、個別テクストの内部だけでなく社会的・歴史的状況のなかからも精査しその特質を明らかにすることを通して、井伏文学を体系的に捉えることを目的とした。これにより、従来の先行研究で自明視されてきた評価の枠組みを抜本的に問い直し、文学史に位置づけにくい作家と言われる井伏鱒二の文学的営為と同時代的意義を明らかにすることを目指すものである。一般には作家の余技とみなされがちな翻訳だが、井伏鱒二の場合には質量ともに充実しており、しかも多岐にわたるという事実がある。本研究はここに着目し、翻訳に関する著作を精査し、さらに個別テクストを取り巻く同時代状況における翻訳のありようについても検討しながら、井伏文学における翻訳概念について解明しようとするものである。

３．研究の方法

上記１で示した研究の背景と経緯を踏まえて、本研究では井伏文学と「翻訳」の関わりを、ひとまず２つの相に分けて考察していくこととした。ひとつめは、表象としての翻訳行為、もうひとつは同時代社会状況との関わりである。これら２つを個別に検討した上で、それらを改めて総合し考察することで当該課題に取り組んだ。それぞれの具体的な調査対象と方法は以下の通りである。

(1)表象としての翻訳行為：

（研究開始時の方法）「翻訳」が登場する井伏の小説・評論を網羅的に調査収集し、それらのテクストでは、「翻訳」がどのように描かれるか、作中でどう機能するかを中心に言説分析を行う。また、同時代の文学作品とも適宜比較し、井伏作品においては表象としての翻訳行為がどのような性質を持っているかを具体的に析出する。→（追記事項）基本的にはこの方法を用いて個別テクストを分析していったが、以下の「４．研究成果」(5) でも述べるように、避けがたい事情により当初の計画を大幅に見直さざるを得ない状況に直面したため、取り上げるテクストが限定的になった。

(2)同時代社会状況との関わり：

（研究開始時の方法）井伏作品が翻訳され海外へ出版される事例を対象として、テクストの流通状況やその背後にある様々な政治的力学を分析する。ここではひとまず 1930 年代から 50 年代にかけての英語翻訳を取り上げ、実際に翻訳され流通するときに何が起こるのかを、当時の翻訳事業に課された役割等も参照しながら明らかにすることを目指した。→（追記事項）このうち 1950 年代の英訳出版に関して米国への資料調査出張を予定していたが、後述「４．研究成果」(5) の事由により中止せざるを得ず、代わりに国内所蔵資料を中心に 40 年代のユネスコの出版事業について調査した。その際、井伏のみならず同時代の作家作品に加え、古典作品についても調査を行った。

４．研究成果

本研究期間を通して達成された研究成果は、主に二つの指向に分けることができる。ひとつは、井伏作品における表象としての翻訳行為に関する研究成果、もうひとつは 1940 年代～50 年代の翻訳出版事業に関する研究成果である。以下では、それぞれの具体的な成果物に即してその概要を示し、本研究課題における位置づけについても併記する。

（1）査読誌への論文発表：

本研究課題のうち、表象としての翻訳行為に関する成果のひとつ。井伏鱒二の小説「「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩をして私は用語について煩悶すること」（『若草』1937 年 11 月）に描かれた呼称と、共同体の共同性創出との相関性を翻訳研究の視点を交えて分析した論文を、学会誌に発表した（日本文学協会『日本文学』2019 年 11 月）。

この論文では、井伏の鋭い言語観の表れとして名高い小説「「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は

喧嘩をして私は用語について煩悶すること」を、音と呼称の相関から読み解き、その批評性を検証した。本作は、作者が出身地に残る呼称習慣を描いたとされるが、作中の語りや表記には、音と文字の結びつき、言葉と共同体の結びつきを相対化させる特徴が見出せる。これらの特徴は、当時盛んに議論された国語問題の一つであるルビ廃止論と、それを牽引した山本有三の論考に共通する同時代的言語観を鋭く問うものであり、井伏鱒二研究のみならず、日本語文学の越境と翻訳をめぐる問題系においても興味深い事例であることを明らかにした。

（2）ふくやま文学館での招待講演：

公益財団法人ふくやま芸術文化財団のふくやま文学館による周年事業鱒二忌において、翻訳という視点から井伏文学を捉えることをテーマにした講演を行った。これは、年に一度開催される鱒二忌の企画の一つであり、研究代表者が担当した本講演では「翻訳から見た井伏文学」と題して、井伏鱒二作品群を通史的に取り上げ、翻訳研究のトピックとも連関させながら井伏文学の特徴と意義を論じた。講演の前後には文学館関係者の方々や鱒二忌に参加された研究者の方々とも様々な意見交換を行うことができ、併せて、館内所蔵資料調査も実施するなど貴重な機会となった。

この講演会を主催したふくやま文学館は、井伏鱒二の貴重資料を数多く所蔵し、展覧会や講演・朗読会等をはじめとする多彩なアウトリーチ活動を展開しており、今回の講演を通してそうした社会活動の一端に関わることができた点でも得るところが大きかった。学術論文や学会発表とは性質を異にするが、これも（1）同様、表象としての翻訳行為に関する研究成果のひとつとして位置づけることができる。

（3）書籍『越境する歴史学と世界文学』への論文発表：

本研究課題のうち、1940 年代～50 年代の翻訳出版事業に関する研究成果のひとつ。井伏作品の翻訳と海外普及という観点から当時の翻訳出版と流通事情に関する調査の一部をまとめたもので、ここではとくに 1940 年代後半から 50 年代半ばまでのユネスコによる日本文学翻訳出版事業を取り上げ、その特徴を指摘した論考を発表した（坪井秀人・瀧井一博・白石恵理・小田龍哉編『越境する歴史学と世界文学』臨川書店、2020 年 3 月）。

日本文学の海外普及は各国諸地域の商業出版の特性と不可分であり、そこに様々な力学が働いたことが近年の翻訳研究ではつとに指摘されている。これを踏まえた上で本研究成果では、非営利の公的機関の動きに注目し、その一例としてユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の翻訳出版事業を当時の会議資料とともに辿りながら、上述の商業出版との関わりを検証した。ユネスコは 1946 年から、非主要言語の文学作品を欧米に広く普及させ各国間の相互理解を促すための支援事業に取り組んでいた。「世界文学代表作品翻訳計画」と呼ばれたこの事業は、商業出版社が、翻訳の難しさに加えて売り上げや経費といった経営上の判断から二の足を踏みがちな文学作品の翻訳出版を企画し、必要に応じて商業出版の販路を見出そうとするもので、日本では外務省・文部省・関連諸団体の協力を得て精力的に進められた。当時の事業資料および欧米圏での日本文学翻訳出版社の動向を調査した結果、ユネスコのこの事業は日本文学の海外普及の一翼を担っていただけでなく、商業出版を支援するかたちで欧米圏にネットワークを構築していったことが明らかになった。それは単なる金銭的支援ではなく、学術的精度の高い翻訳を実現するために国内外の翻訳者や校閲者を引き合わせたりするなど翻訳出版の環境を整えていった点で、インフラ整備事業としての側面を持っていたと言える。日本文学の海外普及にとって 1950 年代～60 年代は黄金時代と呼ばれたが、ユネスコの翻訳事業はその土壌を先んじて準備したことがわかった。

（4）国際ワークショップ「文化の翻訳」の共催および口頭発表：

井伏鱒二個人の文学活動について調査分析を行う一方で、それと同時並行的に近代日本における翻訳の理論的検証についても研究をすすめていき、そちらの研究成果の一部として、国際ワークショップ「文化の翻訳」の運営に取組んだ。

本ワークショップは、「文化を翻訳すること」をめぐる多様な問題系にアクセスしながら「翻訳」それ自体を理論的・実証的に再検討するものであり、イギリス・アメリカ・日本等の各地で活動する研究者を招いて研究発表と討議・意見交換を行った（2020 年 1 月 15 日 於・早稲田大学）。

本研究代表者は、共催者としてその運営を担うとともに、口頭発表「1950 年代における日本文学の翻訳事業――代表作をつくるということ」を行った。この発表では、1940 年代～50 年代におけるユネスコ国内委員会会議資料の調査の一部として谷崎潤一郎の作品選定の模様を例にとり、商業出版社クノップフ・日本ペンクラブ・文芸家協会・翻訳家協会のそれぞれが、日本の代表作品を作り上げていくプロセスを探った。本ワークショップでは、専門を異にする研究者が国内外から集まり、文学・音楽学・演劇美術・医学・文化人類学などの多岐にわたる観点から「翻訳」に光を当てていく試みであったが、専門が異なるがゆえの新たな発見や知見を共有することができ、本研究課題にとっても様々な示唆を得た。

（5）今後の課題と展望：

以上の個別の成果からは、井伏鱒二の文学活動と 1930 年代～50 年代における翻訳出版や言語

政策の関わりと特質について、一定程度は明らかにすることができた。しかしながら、本研究課題期間中は、新型コロナ感染症流行に伴う様々な制限的措置のために予定していた資料調査出張を断念したことと、その後も出産・産後育児に伴う研究休止期間が生じたことから、当初予定していた研究計画を変更せざるを得ず、進捗状況にも大幅な遅れが生じた。とりわけ、翻訳概念の理論的分析と、翻訳出版事情の資料調査については道半ばの状況にある。また、分析対象とした個別テクストの中には、調査を継続しているものも複数ある。(1)で発表した論文の成果からは、翻訳概念における音の位置づけや日本語文学の越境という新たな発展的課題を見出すことができたため、本研究期間終了時点において未完了の調査分析とともに積み残すことになったこれらの新たな課題については、これからさらに準備をした上で改めて新しいプロジェクトとして着手することにしたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 塩野加織	４．巻 797
２．論文標題 「音を聴くこと、音を書くこと：井伏鱒二「「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩をして私は用語について煩悶すること」論	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『日本文学』	６．最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 塩野加織	４．巻 1
２．論文標題 「ユネスコによる日本文学代表作品翻訳計画：その成果と課題」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 坪井秀人、瀧井一博、白石恵理、小田龍哉編『越境する歴史学と世界文学』	６．最初と最後の頁 185-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 塩野加織
２．発表標題 「1950年代のユネスコ文化事業と翻訳――代表作をつくるということ」
３．学会等名 国際ワークショップ「文化の翻訳」
４．発表年 2020年

１．発表者名 塩野加織
２．発表標題 「「翻訳」から見る井伏文学」
３．学会等名 ふくやま文学館井伏鱒二没後二六年鱒二忌（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

中国新聞ニュース「作家井伏鱒二　講演でしのぶ　福山の文学館」 http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=91945

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
国際ワークショップ「文化の翻訳」	2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関